「信州からリニア問題を考える」シンポに大勢の住民参加（3）

中野貞彦

【3月8日（日）に長野県飯田市で開かれたシンポジウム「信州からリニア問題を考える」（主催はJSA 関東甲信越地区会議）の概要を本誌4,5月号で紹介してきて、今号で最後になります。】

Q：飯田市松尾町に住んでいます。先ほど松島さんは、日本科学者会議はそんな力はない・・・とおっしゃいましたが、それでも期待を込めてお願いをしたい。例えば2027年にリニアが開通するとして、その時に成人を迎えるのはいま幼稚園児だったり小学生の子供たちです。およそ飯田市ではリニアの利便性とか高速性だけが宣伝され、先ほど松島さんからお話がありましたように下敷きが配られたりして、一面的な宣伝が行われています。今日ここで話題に上っている事も含めて、リニアにはこれだけの問題がある、ということを示すジュニア向けの冊子をぜひ作っていただきたい。これこそ教育現場で問題として取り上げることだと思います。マスコミや御用学者は利権があつたりして、なかなか黒を黒という状況にはない。日本科学者会議のみなさんは信念をもってやられておられるので、子供たちに向けての冊子を作ってください、日本全体に発信できるものができるのではないかと。ぜひご検討をお願いしたい。

A（野口）：たいへん勇気づけられるご意見をありがとうございました。実はこの会場に日本科学者会議の全国の事務局長で、中央大学の経済学部教授の米田貢さんが駆けつけておられます。今のことも含めて日本科学者会議のことをご説明いただきたいと思います。

＜経済学者はどう考えているか—リニアの2つの側面—＞

米田：米田です。今日長田さん、松島さんのお二人は自然科学系のお話でしたが、経済学者としてリニアの問題をどう考えているか、簡単にお伝えしたいと思います。一言で言えば経済学者の立場から見ると、リニア中央新幹線は不急不要の無用の長物です。そして地域経済にとってみるととんでもない害悪を与えるだけのものです。去年われわれの出した声明で、計画を中断して直ちに撤回しろという要求を出しました。

簡単に言えば、リニア中央新幹線には二つの側面があります。一つは、従来型の新幹線ではスピードが遅すぎる、リニアは500km/hまで出せるぞ、と言っていますが、ただもう中国でもフランスでも軌道の新幹線で500km/h近くのスピードを試験的ですが実現しています。リニア新幹線で東京と大阪間が67分ですが、飛行機で1時間です。本当にリニアは今日言われているように、完全にリスクはなくせないのではないか、そんなのに乗る人いますかね。そして間違いなく、JR

東海は過大需要予測を偽っています。彼ら自身の統計のインチキさが相当出ています。人口減少にも関わらず、JR 東海はこのリニア中央新幹線ができる時には、大体既存の東海道新幹線と合わせて、現在の需要の1.6倍くらいの需要予測をしているのです。人口はどんどん減っていき、生産年齢人口はもっと急激に減ります。東京と大阪でたぶんテレビ会議がもっと一般的になります。出張で1時間で行って帰ってというそんなことをしなくなる可能性は十分あります。そういう点で過大な需要予測をやって見せているのです。

もう一つ、地域の経済の問題です。私はもともと金融論が専門なのですが、経済理論の関係で地域経済もやりました。私は富山県出身です。今度北陸新幹線が通りますよね、富山も大誘致合戦をやった。だけどそれで富山経済が発展するなんて本当に考えられません。この近くでは東海道新幹線の岐阜羽島駅、駅は作ったけれど、周りは全然開発されずに残っているでしょう、ああいうものです。では誰が得をするか？速い交通機関はお金で時間を買う。得をするのは東京だけです。九州新幹線も通りましたよね、いちばん得をしているのは博多です。九州中の若い人たちが、鹿児島よりも1週間に1回、博多に買い物に行きたいのです。それで、博多は潤います。だから中央集権的な交通システムは、速ければ速いほど中央だけが儲かります。彼らだって明確に言っています。東京圏を東海・近畿地域まで拡大できれば、東京はもっと発展する。東京に本社をおいているのはグローバル企業です。グローバル企業の利益と、東京一極集中型の交通システム、国土開発システムというのは完全に表裏一体化しているのです。リニア中央新幹線沿線地域の首長さんは必死になって誘致合戦をやっていますけれど、普通の新幹線ですら経済効果がないのに、なんでリニア新幹線で地元への経済効果があるんですか？残土処理は大変です。それと地下水枯れ、高尾山の圏央道工事では本当に水枯れは深刻な状態で、全部つけが地元に戻ってきています。百害あって一利なし、なんです。

その点でみなさんにぜひ訴えておきたいのは、おそらくグローバル企業中心の経済運営も破綻に近づきつつあります。トヨタは儲かっているけども、国民経済は衰退していっています。もっと深刻化するのです。それを打開する道は、循環型地域経済を無数に作ること。ここは長野県の南信ですよね、南信全体の地域経済が潤うような交通システムは何か、あるいはそこでの農林業と地場産業を中心にした産業の活性化のためにはどんな交通手段がいるか、あるいは基盤整備が必要なのか、これをみなさんと考えればいいのです。別に残務処理を全部地域に押しつけるようなリニア中央新幹線を受け入れる必要は全然ないんです。残土処理受け入れを絶対しないぞ、というのはかなりの抵抗になるでしょう。そういうふうな運動の積み重ねで、白紙撤回まで追いやれるのではないか、と思います。

最後に事務局長の立場から、宣伝ですが、3月27日から横浜で原発問題の国際シンポジウムを行います。ご存じのように、政府・財界は原発事故から4年間た

って再稼働をやるうとしてしています。そのために彼らは何をやるうとしているかと言え、福島事故はなかつたことに、したい。年間 20 ミリシーベルト以下のところだつたら戻れ、と言っているのです。そして戻つたら損害賠償はなくなるのです。こんなこと許されていいですか？ これを既成事実としたうえで、原発再稼働、あれだけの事故でも安全度は回復しているのだからもう原発再稼働しようよ、という話なんです。原発問題とリニア中央新幹線問題はかなり密接にむすびついて、おそらく安倍首相あたりは原発再稼働させるためにも、リニア中央新幹線問題を使っているのではないか、そういう意味でも幅広い運動と連帯してリニア中央新幹線、できるだけ早期に撤回させましよう。

A(野口)：ありがとうございます。先ほどのご意見の中でジュニア向けの本のお話、3月中旬に日本科学者会議の常任幹事会がありますので、そこで提案をして、実現に向けて努力して参りたいと思います。それでは、次の方、短か目をお願いします。時間も迫っていますので。

<電磁波の人体への影響について>

Q：伊那市から来ました。リニアのいろいろのことは事務局長の先生のお話でだいぶ払拭されましたので、電磁波の問題にしぼって質問します。10年くらい前に長野市で当時山梨大学におられた有泉先生のお話を聞いたことがあります。電磁波が人間の脳に与える影響というお話でしたが、それがいま電磁波過敏症という形で日本各地にいろいろな症状で悩んでいる方がいて、どんな医療機関を訪ねても何でもありませんよ、と言ってその日のうちに帰される。吐き気がしたり頭痛がしたり、動悸がしたり、いろいろな症状を訴えてもいっさい、あなた大丈夫ですよと、帰される。私自身も吐き気で救急車で運ばれて、その日のうちに大丈夫です、何の問題もありません、と言われたのですが、そういった体に異常を感じていて、どうしても不具合なんだけれども、医療機関はそれを証明してくれないのですね。電磁波が問題ではないか、というと、そんなことあるはずないと怒られるのです。どうしたらいいのか？ 私の身内が、病院の検査技師をやっていた者が、いっぱい電磁波をあびた結果、いままったくフラフラ人間になってしまつて日本中の医療機関を訪ねたけれども、救いようのない現実のまま、ある施設にいます。それで、障害者としても認定されずに、本当に厳しい生活を繰り返しているのですけれども、電磁波って本当に私たちの体に何の影響もないのか？ 私自身は21世紀の最大の公害になるだろうと思います。いま先生方はそのことをどう思つておいでなのか、お伺いしたいのと、もう一つ、日本学会会議と日本科学者会議は、何の関係もないのですか？ (笑)

A(長田)：電磁波が人体に影響があるということは確実だと思います。物理学的な一般論として、それは人体中の電子や分子は電磁波と必ず相互作用をおこないます。どの程度影響があるかということは疫学的にかなり国際的にも研究してい

ます。それについて、我々も検討しております。JR 東海はいろいろ測ったけれども、問題がない、と言っていますが、それに対して疑問をもっています。だからその点、もう少しはっきりしたら、お知らせをしたいと思います。

確かに電磁波暴露問題はそうとうやっかいな問題で、原発における低線量被ばくと同じような議論が関係者の間でもおこるでしょう。低線量被ばくの問題では論争があつて、なかなかたいへんです。リニアの電磁波の問題も論争が起こると思います。電線に電流が流れれば、電線に巻きつくように必ず磁界が発生します。国際的なデータによれば、高圧線の下の子供たちは他の子供たちに比べて3倍以上白血病になっているとの報告もあります。いろんなデータがあるので、きちっと調べていく必要があります。今日いまここで私から、詳細を申し上げるわけにいきませんが、重視して研究をかさねる必要があると思っています。

日本学術会議と日本科学者会議との関係ですが、日本科学者会議の会員の間で、学術会議に対して不信を持っている人もたくさんいます。日本学術会議の会員の人たちの多くが‘御用学者’とは思いません。誠実で信頼できる科学者はたくさんいます。しかし、戦前の戦争協力など学術のあり方を反省し、平和と民主主義、国民生活向上に献身することを誓った日本学術会議は、財界や政権の干渉・介入をうけて、会員の選出方法も財界・政権の意をくむ‘科学者’が選ばれるようになり、全体としては、出発点の初心が弱まってしまった、変節をかさねてきたという面もあります。ですが、やはり日本国民のいろんな関心に基づいて、個別的にある程度納得のいく、一定程度評価できる声明を出したりすることもあります。ですから、ただ一面に日本学術会議はだめだというのではなくて、日本国民の利益になるところで私たちと一致点を広げて、きちんと話し合いが出来て、共同できるものは共同していきたいと思っています。

(司会 野口) : あと 10 分くらい、お一人かお二人、簡単をお願いします。

(橋本良仁) : 私は日本科学者会議の会員で、国定公園高尾山をトンネルで貫く圏央道建設という公共事業問題に 30 年近く取り組んできました。現地のみなさんのご意見を伺うにつけ、リニアは日本の未来にとって、原発と同様にやってはいけないものだ、とその思いを強くしました。我々は、この問題に対し司法の面からも取り組まなければなりません。住民の方たちと、近い時期に裁判を立ち上げよう、と検討をしているところです。国を相手の裁判では多くの困難が付きまといまいます。しかしこれまでの公害・環境問題訴訟は、長いあいだの国民の闘いがあり、多くの成果と教訓があります。どんなに困難な訴訟でも、相手よりも少しでも長く闘う必要があると思うのです。私の大好きな弁護士、酒飲み仲間でもある、有明海の裁判の弁護団長を務め、玄海や川内原発訴訟の弁護団共同代表をやっている馬奈木昭雄さんは、こう言います。「私たちは絶対に勝つ、なぜならば勝つまで闘うからだ」と。最初、この弁護士はいい加減なことを言うと思いましたが、いまは

その思いで闘わなければと思っています。これは今生きている私たちだけの問題ではない。今の世代の私たちはその責任を果たす、そういう意味で、日本科学者会議はかつて原発に対して甘い姿勢があったことに忸怩たる思いがあるものだから、リニアだけは絶対に止めさせたいという思いです。決意表明みたいなことになりましたが、みなさんと一緒に闘いたいと思います。

Q: 大鹿村から来ました。いま釜沢地区というところで、JR 東海が水平ボーリング調査をやっているのですけれど、24 時間体制でやらせてほしいと、かなり強引な形で、地権者と自治会長に話をすればいいだろうみたいな感じでしたが、それは困るということで、住民への説明会を持つようにして、24 時間はとんでもないと言ったら、試験的にやらせてほしい、ということになって、試験をやったんですけど、発電機が 24 時間運転でうるさいということで、今度は騒音防止を施したんですが、却って共鳴してしまって余計にうるさくなってしまった、谷底なので、距離が離れたからいいということにならなくて、向こうが思っていたよりも、上の方に響いてしまうのですね。それに対して地元の人達が夜中の工事は絶対認められないということで、いまやり合っています。知っていただきたいと思って発言しました。

(司会 野口) : ありがとうございます。これで、終わりにします。今日は参加者はどれくらいと思われますか？ 飯田市には会員はいません。ここで開催するのは大変冒険ではありました。でも南信地域で多くのみなさんがリニア問題を真剣に悩んでおられ、また訴えたいと思っておられる方々がおられることを知っております。リニアの幻想をもっとも振りまいている中枢ではありませんか。そこで、科学的に解明する機会を持つと、いうことでやりましたら、130 名の方に集まっていたいただきました。ありがとうございます。確かに NHK に申し込んで討論会をやれなどと言われると、4000 人の会員しかいません。これを 5000 人、6000 人に増やしたいと思っていますけれど、まだその力がありませんので、ぜひこうしたリニア新幹線問題のシンポジウムを各地でやると同時に、先ほど提案がありました、子供向けのリニア新幹線に関する普及書もぜひ考えてみたいと思います。一人でも多くの人にリニア新幹線の本質をわかっただく機会をいろんな形で発信をしていきたいと考えていますので、また一緒にこの問題を考えて行こうではありませんか。今日は本当にありがとうございます。(終わり)